
ロゴセラピー

人間への限らない畏敬に基づく心理療法

エリーザベト・ルーカス著
草野智洋，徳永繁子訳
赤坂桃子翻訳協力

新教出版社，A5判290頁，3,300円，2024年8月刊

（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）**山中康裕**

著者は、フランクルの有名な「ロゴセラピー」を、ベルリン大学で学生として学び、それを、これまでずっと実践してきた真正のロゴセラピストであり、本書は、その教育者として書いた著書のドイツ語原版からの翻訳である。年齢を見ると、評者よりたった1歳下に過ぎないので、評者とはほぼ同世代人と言ってよいだろう。評者との違いは、評者は日本の医学部学生であったが、彼女はオーストリアの臨床心理セラピストの学生だったことくらいだ。ただし、評者の師・岸本鎌一教授がフランクル教授の信奉者で、評者の学生時代にフランクル教授を講演者として招き、評者はそれを直接聴講して、フランクルの「意味への意志」「noogene Neurose ヌーオゲーネノイロゼ／精神因性神経症」「paradoxe Intention パラドクセ インテンチオン／逆説志向」などの考え方に深く共鳴したが、彼を名古屋から東京に送り届け、ホテル探しにとんでもない苦勞をした経験から、フランクルの思想や方向性は全く賛同できるが、足のびっこな評者に大きな荷物を持たせ「救急口が塞がっているようなホテルに泊まるわけには行

かん」とか「緊急事態時に飛び出す空間がないようなホテルはだめだ」とかのいろいろな難癖〔しかし、彼の言っていることは正しいと今でも思うし、それくらいの慎重さがあったからこそ、アウシュビッツでも生き残れたのだ〕をつけては4回もホテルを回って、困り果てている評者のことを一切考えようともしない彼に、評者は「フランクルなんて、大嫌い!」と、かつて本誌に書いたことがあるくらい、人の気持ちに一片の関心すら寄せない彼の人間性に疑問を持ったのだった。

しかし、些細な個人的体験だけで、この大切なセラピーを非難しようなどと思っているわけではない。だからこそ、彼のお弟子さんがどういうふうに出る治療法を指導してきたのか？ に関心を抱いて挙手したのであった。読んでみて一番感じたのは、彼女も現在のアメリカ中心の世界的風潮〔DSM体系の影響をもろに受けているICD診断体系〕に苦勞している姿に、評者は、同情をすら感じたのである。つまり、現今のEvidenceや科学的と称する一方的な操作的診断などに四苦八苦している上に、一所懸命に彼女なりの抵抗をしつつ、フランクルの方法を、何とかしてドイツ語圏のみならず、他言語圏にも広めようと頑張っている姿に、喝采を送りたい。しかし、これを読んですぐさまとりかかろうとする読者はあまりいないだろう。説明がくどすぎるからだ〔これも理解はできる〕。評者からの実際の望みを言えば、真の事例を、もっときめ細かく赤裸々に示した方がずっといい、と思ったことであった。

原書：Elisabeth Lukas：Lehrbuch der Logotherapie：Menschenbild und Methoden